

# ANNUAL REPORT 2015

Center for Regional Partnership  
Graduate School of Agricultural Science  
Kobe University

六甲山

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター

神戸大学大学院農学研究科地域連携センター  
平成27年度 活動レポート



# 「農を学ぶ。」



## Contents

---

### 1. はじめに

事業概要

センター長ごあいさつ

### 2. 地域共同研究事業

ニホンザルの誘導域と農家の営農実態の変化を通じたサル対策関連施策の評価

農産物交流と都市住民の「農」への関心についての研究

協働プラットフォーム形成による六甲山の循環型環境保全システムの構築

人工衛星画像を用いた兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発

駆除した外来生物の活用方法の研究

農山村における地域固有性の発現とその活用手法に関する研究

### 3. 地域交流活動

### 4. 学生地域活動サポート事業

### 5. 食農コープ教育プログラム

### 6. 農村ボランティア活動支援

### 7. 相談情報発信

### 8. 組織体制

# 01 はじめに

## 地域連携センターの役割とは

グローバル化がすすむ一方で、超高齢社会をむかえ、地域の社会経済の問題はますます大きくなっています。「地方消滅」の危機に対して、「地方創成」がとえられ、大学には、地域の「知の拠点」としての役割を果たすことが求められています。

農学研究科地域連携センターは、地域と大学をつなぐハブとなり、課題解決や価値創造（イノベーション）を図ることを目的として設立されました。その使命は、1) 農学研究科が有するあらゆる知をもって、地域の課題解決に貢献すること、2) 大学生および地域の人々に、現場での経験に根ざした学習の場を提供すること、そしてその交流の上で、3) 新しい知を創造し、世界と日本の地域の内発的な発展に寄与することです。

地域の多様なニーズや課題を、農学研究科・農学部の教員や学生につなげ、共同研究や実践として取り組むことをサポートし、その解決を図るといふ、中間支援組織としての機能を果たし続けていきたいと思っています。

## ごあいさつ

近年大学は、教育、研究と並んで社会貢献の重要性が増してきています。農学研究科地域連携センターは、大学が保有する知識や技術を農山村地域の問題解決に活用し、地域社会の発展に貢献することを目的として平成15年に創設されました。主に次の3つの活動を実施しています。まずは、「地域共同研究」です。地域が直面している問題を解決し、地域がより発展するための調査研究を自治体などと共同で進めています。2つ目は、「地域交流活動」です。フォーラムや学習会などの開催を通じて相互理解するとともに、知識を共有し地域の発展につながる活動をしています。また、地域交流を通じた実践型の学生教育にも取り組んでいます（平成23年4月には、これまでの成果をまとめ「農村で学ぶはじめての一步」（昭和堂）を出版しました）。3つ目は、「相談・情報発信活動」です。共同研究や地域の問題の相談に応えるなど、研究や活動における事務局業務をするとともに、ホームページなどを通して最新の情報を発信しています。

平成18年に篠山フィールドステーションを開設し、平成19年には農学研究科と篠山市との間で地域連携協定が締結（平成22年には全学を対象とした大学協定を締結）され、様々な地域連携活動を展開しています。この「活動報告書」は、平成26年度に当センターが実施した活動を取りまとめたもので、我々の活動の理解を深めていただく一助となるとともに、地域の発展に役立てば幸いです。

地域連携センター長

星 信彦



## 02 地域共同研究事業

### 自主共同研究

研究員が中心となり、自治体や住民団体、NPO、協同組合等とともに、地域の課題解決や持続的発展に寄与する調査研究をおこなっている。



#### ニホンザルの遊動域と農家の営農実態の変化を通じたサル対策関連施策の評価

清野美恵子（特命助教）  
上田 羊介（農学部生産環境工学・学部班）  
鈴木 克哉（NPO里地里山問題研究所）  
細見 英志（篠山市農都環境課）

兵庫県篠山市には県下で最も高密度にニホンザル（以下、サル）が生息している。篠山市ではサルによる農作物被害や家屋侵入などの精神的な被害が継続し、サルと人間社会との間にコンフリクトが生じている。

篠山市では、近年、大規模に電気柵設置が進められるなど被害防除に多大な費用を投じた。だが、そうした施策評価と営農実態への影響は未整理なため、どの程度、サル対策に予算を投じるべきかの判断が難しい。そこで、本研究では、電気柵設置前後のサルの遊動域と、各集落の生産作物と圃場面積の変化を比較した。電気柵設置後の圃場への侵入はほとんどみられなかったが、出没集落数は増加した。年度末に収集する篠山市全体の被害額の結果を合わせて、篠山市の獣害対策の施策評価を試みる。



#### 豊嶋尚子（学術研究員）

造園コンサルタント、都市計画系シンクタンクにて、都市公園や公共空間の計画および設計を担当。育児休職を経て、まちとむらをつなぐNPOの活動にて現場復帰。



#### 内田圭介（学術研究員）

造園コンサルタントを経て、都市部におけるエコでスローなライフスタイルを提案する「ミドリカフェ」を2007年にオープン。菜園や庭づくりの設計デザインをおこなう。



#### 農産物交流と都市住民の「農」への関心についての研究

豊嶋尚子（学術研究員）  
大阪府立大学緑地計画研究室  
大阪Marche連合

ロハスやスローフードといったこだわりの食のライフスタイルが都市住民に定着してきている。農家さんから直接新鮮な野菜を購入できるマルシェが、大阪市内のオープンスペースや店頭を利用して大小さまざまな規模で開催されており、多くの都市住民が農家さんとの会話を楽しみながら買い物をしている。

本研究ではこのような農産物を通じた交流のなかで、「農」への関心が高まる手法についての調査研究をおこなった。その結果、マルシェ利用により普段の生活でも農産物に関する意識が高まり、また農産物加工などのワークショップに参加し体験することにより、農業への関心が高まるのがアンケート調査から明らかとなった。



#### 協働プラットフォーム形成による六甲山の循環型環境保全システムの構築

内田圭介（学術研究員）  
オテル・ド・摩耶  
神戸布引ハーブ園 他

六甲山をめぐるっては、観光やレクリエーション利用などにおける側面での活性化は見られるものの、自然環境の保全に特化した取り組み（土砂災害の防止・資源の有効利用など）は、まだ不十分な状況にあると言える。特に資源（間伐材・剪定枝・落ち葉など）の有効利用をめぐるっては、法的な問題（自然公園法など）や林道（搬出道）整備の問題などが挙げられ、これらを包括的に解決する仕組みづくりが必要と言える。

そこで、六甲山の自然環境保全をどの様にランディングしていくかの意見交換の場となるようなプラットフォームを、本学生中心に行政・企業・地域住民などを巻き込んで、つくっていく取り組みが始まり、そのための「六甲山勉強会」と「子供の森のレストランプロジェクト（山の落ち葉で土と野菜づくり）」を本年度に行った。

## 02 地域共同研究事業

### 地域共同研究支援

農学研究科の研究者などが地域と共同でおこなう調査研究のスタートアップや周辺のサポート、学内・国内外への情報発信(セミナー開催、パンフレット等の作成、ウェブ等での公開)のサポートを行っている。



人工衛星画像解析を用いた兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発

長野宇規(農学研究科・生産環境工学)  
兵庫県篠山市・洲本市

日本の農地は現在温暖化に伴う災害の増加、営農者の高齢化と農産物価格低迷による耕作放棄地の増加など、急激な構造変化に直面している。適切に状況を分析し、対策を講じるためには各地域の土地利用変化、営農状況を毎年把握することが重要である。しかしながら人手による調査は多大な労働負担を伴う。そこで本研究は昨年度に引き続き、無料公開されている衛星情報と水土里情報システムなどの農地GIS情報、およびドローンを利用した空撮を組み合わせることで、土地利用調査の自動化を目指すものである。災害時における対応の迅速化、農業戦略の策定など様々な面での活用が期待される。



駆除した外来生物の活用方法の研究

鈴木武志(農学研究科・農環境生物学)  
農都ささやま外来生物対策協議会

侵略的外来種の生態系へ及ぼす影響が問題視されている。侵略的外来種の生態系へ及ぼす影響が問題視されている。篠山城跡南堀ではハス復活に向けミシシippアカミミガメ(*Trachemys scripta*)を2014年から800匹程度駆除した。本研究では駆除したアカミミガメについて、廃棄処分を行わずに有効活用することを目的とし、その方法について検討をおこなった。今回は有機肥料としてリサイクルが可能かどうかを調査することとなった。有機肥料化する手法としては、家庭用のリサイクラーを使用して個体をまるごと乾燥・粉碎し、その粉碎したものについて化学性を調べた。調査項目はpH、ECと肥料成分(窒素、リン、カリウム)その他の元素(Mg, Caなど)とし、測定した結果、リン、チッソが高く、カリが低いことが分かった。今後は肥料として適切な作物の選定や施肥方法などの特性を明らかにしていく予定である。



農山村における地域固有性の発現とその活用手法に関する研究

中塚雅也(農学研究科・食料環境経済学)他  
兵庫県篠山市

農村地域固有の社会文化、自然資源、知識の喪失が危惧されるなか、地域資源の保全と活用による農村地域の発展モデルを確立することが目的である。具体的には、多様な地域アクターの連携により、1) 地域固有種の収集と特性分析、および地域内資源の活用による省資源型栽培方法の確立すること、2) 獣害として問題になっている野生動物と人との社会関係の分析により、野生動物を包摂する社会への展開課題を解明すること、3) それらの動植物を地域の資源として位置づける地域マーケティング戦略を明らかにするとともに、その推進における大学と地域の連携システムを確立することを目指す。

本アクションリサーチの中心となるフィールドは兵庫県篠山市であり、様々な層での共同研究を展開している。本年度は、本研究の一環として、農学研究科地域連携センター等との共同セミナー「地域固有性を活かした地域づくり」を開催し、オープンな議論をおこなった。



## 03 地域交流活動

### 地域連携研究会「A-Launch」の開催

地域での実践活動や農学の先端研究・理論に気軽に幅広く触れる場となることを目指し、地域連携研究会をトークイベント **A-Launch** として、昼休みの時間帯を利用してランチを食べながら気軽に参加できるセミナーを開催しています。

#### A-Launch 実施の概要

【第11回】2015.6.19 「ドイツの土壌から見る食文化」

川西あゆみ（農学研究科地域連携センター 学術研究員）

【第12回】2015.9.29 「篠山フィールドステーションを拠点とした 地域連携活動の展開と今後の展望」

清野未恵子（農学研究科地域連携センター 特命助教）

【第13回】2016.1.8 「ローカルから社会を変えるー中国から篠山、そして島根へー」

高田晋史（農学研究科地域連携センター 学術研究員）



## 04 学生地域活動サポート事業

農学部・農学研究科の学生の地域での実践活動、研究活動をサポートしています。

2015年度承認した学生活動団体は3団体（ささやまファン倶楽部、にしき恋、サンセット12）で所属学生人数は107名である。また、篠山市で活動をおこなう団体相互の情報共有を図るため「篠山学生活動団体連絡協議会」（篠連）を組織し、その運営を支援しています。定期的なミーティングによる各団体間の情報共有だけでなく、今年度は篠山味祭りへの合同出店に対して事前の計画から当日の運営までを支援しました。

また学内においては、篠山市で活動する学生団体が農家とともに生産した農作物（黒大豆等）の直売所として「ささやま家（や）」を2013年度より設けており、生産から販売までの過程を経験する機会となっています。販売収益は、交通費等の学生活動団体の活動資金として活用しており、今年度は3回開催しました。

なお、「にしき恋」は、農林水産省が主催する「食と農林漁業大学生アワード2015」においてファイナリストに選ばれ、六本木ヒルズで行われた選考会（2015年11月8日開催）においてプレゼンテーションを行いました。大賞は逃したものの、高い評価を得ました。





2013年より学生の地域連携活動をサポートする「学生地域活動サポート事業」を開始しました。この事業では目的は、農学部・農学研究科学生の地域の課題解決価値創造につながる協働活動のサポートをします。



### 小学生との交流事業

にしき恋

篠山市西紀南まちづくり協議会支援のもと、小学生との交流の場づくりに携わりました。「小学生がやりたいことを小学生自身が企画する」ために、パイ投げや顔への落書きなど、普段できないような遊びを実施しました。



### 食と農林漁業大学生アワードへの招待

にしき恋

食と農林漁業に関わる全国の学生団体が日頃取り組んでいる活動をプレゼンするコンテストに、ファイナリストとして招待されました。受賞は逃したものの、「人との繋がり」や「活動を楽しむこと」の大切さを学びました。



### 里山の資源活用を考えるワークショップ

ささやまファン倶楽部

普段、農村の野草のほとんどは「雑草」と一括りにして刈られてしまいます。これを活用する手段として、草木染めに着目し、野草の新たな使い道を考えています。2015年度は、セイタカアワダチソウを使って木綿の布を染め、テーブルクロスを試作品を作成しました。



### 田んぼビオトープにおける橋づくり

ささやまファン倶楽部

豊かな自然のなかで環境創造型農業を実践する篠山市真南条地区では、都市では見ることができない生物たちが息づいています。そこで、地域の人が生物の多様性に触れる機会を作ろうと、休耕田に竹からできた橋を架け、田んぼの中まで入って生物たちを見ることができるようになりました。



### 農産物の学外販売

にしき恋

サークル内で販売グループを確立し、大学や篠山市といった従来の販売場所に限らず、阪急百貨店やエキマルシェ新大阪といった、あらたな商業施設内での販売にチャレンジしました。パッケージを工夫し、試食をしてもらうなど、PRを積極的に行いました。



### 企業のメニュー開発への協力

にしき恋

高速道路のサービスエリアでレストランを営む企業から、地域活動をしている学生ならではのメニュー提案をしてほしいと依頼を受け、黒豆の販売促進へとつながるようなメニュー提案を行いました。



### 祭礼参加による地域との協働

サンセット12

篠山市日置地区の方々と連携して地域の祭りに参加したり、ほかの学生を募ったり、祭りを盛り上げる活動をしています。活動は、2014年度の農学部の授業「実践農学入門」で実習に参加したメンバー中心に行っています。



### 「丹波篠山味まつり」への参加

篠山学生活動団体連絡協議会

篠山で活動する各学生団体と篠山市日置地区の方々が、それぞれの商品の共同販売を行いました。黒枝豆の早もぎ体験という新たな試みでは、大人から子どもまで多くの方が参加されました。学生ならではの視点と元気のよさで地域を盛り上げよう取り組みました。



## 05 食農コープ教育プログラム

地域連携センターは、農学部「食農コープ教育プログラム」の推進主体として、農学部の協力教員とともに、次の3つの科目を開講しています。

### 実践農学入門 [1年：通年]

通年で実際の農家に師事することを通して、農業・農村と持続可能性に関する基礎的な理解を深めます。農家等との交流を通じてコミュニケーション能力などの基礎的な実践力を養います。

- ・校内学習（事前・事後学習、活動発表会など）
- ・春夏秋冬5回の篠山市内農家への弟子入り実習
- ・1回以上の農村体験活動やボランティアに参加

### 兵庫県農業環境論 [2年：後期]

兵庫県の農林水産施策に実際に携わって行政職員からの直接講義を受ける。兵庫県の農山漁村の現状を理解するとともに、グループワークによる課題解決のための事業提案をおこないます。

- ・行政職員、JA関係者による兵庫県農林漁業の実態と施策に関する講義
- ・グループでのワークショップにより具体的な事業施策を提案

### 実践農学 [3年：通年]

農業農村の持続可能な発展のための実践活動に参画することにより、農業農村に関する理解の深化と、実践的な計画立案、実行能力を身につけます。

- ・宿泊滞在型のフィールドワークやアクションリサーチ
- ・兵庫県農業環境論や実践農学入門での事業提案の具現化を目指
- ・実践農学入門でお世話になった地域での再活動

※実践農学入門との連続性を果たすために、2016年度から2年次開講と変更





## 06 農村ボランティア活動支援

### 農村ボランティアバンクKOBЕ「ノラバ」の運営支援

農村ボランティアバンクKOBЕ「ノラバ」の事務局として、ボランティアを必要とする農家と大学生のマッチングをおこなっています。2015年末の登録者数は468名。

今年度は、栗やブルーベリーといった果樹農家等の登録があり、募集先や作業のバリエーションが増えました。



# 「ノラバ」

農業をやってみたい  
農業・暮らしごとをサポートしたい  
有機農業や環境に興味がある  
豊かなむらと自然を守りたい



農村ボランティア BANK

## 07 情報発信

### ホームページ等による情報発信

地域連携センターHP(<http://kobe-face.jp/renkei/>)で、共同研究の内容や地域交流イベントの告知・レポートなどの情報を発信したほか、食農コープ教育プログラムHP(<http://www.kobe-face.jp>)ではプログラムを受講する学生の声を発信しました。また学生たちがより日常的に連携センターの情報にふれることができるようfacebookとtwitter(@agregion)による情報発信も適宜おこなっています。

### オフィスアワーの実施

地域と農学研究科を繋ぐ窓口として、情報の受発信を行い各種相談に答えています。2015年は、70件の相談が寄せられました。最も多いのは神戸大学生・大学院生の40件で、その内容はインターンシップや食農コープ教育、および学生地域活動についての質問や相談であった。次いで地域企業7件、さらに行政6件、大学教員6件、地域団体3件とつづき、幅広く相談を受けています。地域企業および行政からの相談内容は、地域共同研究に関する問い合わせや学生団体への協力依頼等が中心でした。

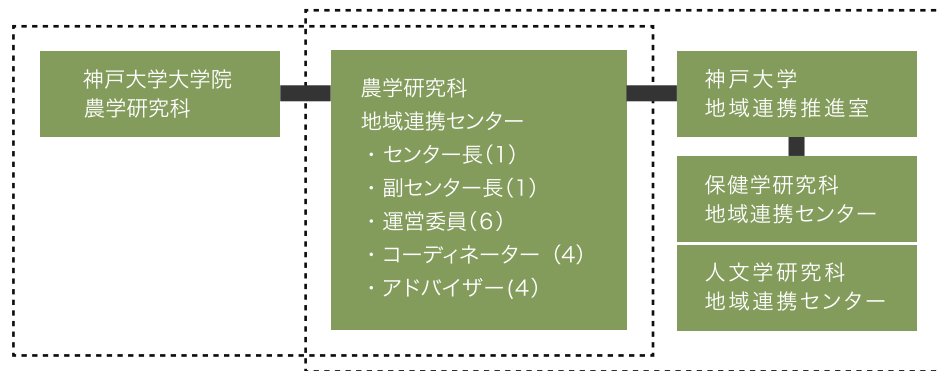
### オープンキャンパスでの展示

2015年8月11日に実施された神戸大学農学部オープンキャンパスにおいて、「食農コープ教育」プログラムのブースを設置し、高校生や保護者に対し、カリキュラムや活動紹介のパネルを展示するだけでなく、地域連携研究員・現役大学生を配したカフェコーナーをもうけ、プログラムについて自由に話せる場を提供しました。



## 08 組織体制

農学研究科(農学部)および神戸大学地域連携推進室の協力のもと、センター長と副センター長を中心に、運営委員会がボードの役割を果たし、教育研究スタッフ、事務スタッフ、学生ボランティア等が協働で事業を推進します。



### 【平成27年度スタッフ】

センター長	星信彦(応用動物学 教授)	
副センター長	枚本敏夫(農環境生物学 教授)	
運営委員	庄司浩一(生産環境工学 准教授)	中塚雅也(食料環境経済学 准教授)
	實安隆興(応用動物学 助教)	枚本敏男(農環境生物学 教授)
	黒田慶子(応用植物学 教授)	藍原祥子(応用生命科学 助教)
地域連携 コーディネーター	木原弘恵(特命講師)	豊嶋尚子(学術研究員)
	内田圭介(学術研究員)	山野ゆかり(事務補佐員)
	清野未恵子(特命助教 ~2015年10月)	
	川西あゆみ(学術研究員 ~2015年6月)	
アドバイザー	加古敏之(神戸大学 名誉教授)	伊藤一幸(応用植物学 元教授)
	高田理(食料環境経済学 教授)	内平隆之(兵庫県立大学 准教授)

### 神戸大学院農学研究科地域連携センター

【連絡先】

address

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 A103

phone

078-803-5939

mail

ans-chiiki@edu.kobe-u.ac.jp

officehour

月・水・金 13時～16時